ジェイン・オースティンと「恋愛」

榎本武文

ジェイン・オースティンの小説がすべて同じひとつの物語をもとにして作られていることは、だれの目にも明らかである。すなわち、若いヒロインがさまざまな出来事に出会ったあとで自分にふさわしい男性と恋におちて結婚し、幸福を手に入れる。ところで、この「恋」とはどのようなものだろうか？　言いかえれば、ジェイン・オースティンはその小説の主要なテーマである「恋愛」をどう考え、いかに表現しているだろうか？

オースティンが物語の中心に若い女の恋と結婚をおいているという事実は、ある程度まで、先行する小説の物語パターンからの影響と、十八世紀から十九世紀初めの社会変化によって説明することができる。十八世紀後半以降出版され始めた女性作家の小説は、まさに、適齢期の女性の人生における最大の事件を主題にしており、オースティンがこれらの小説を多数読んでいたことは、明らかにされている。[1] また、十八世紀イギリス社会では、家族の利害を重視する旧来の結婚形態が、個人の感情に従って相手を選ぶ新しいやり方に変化しつつあった。[2] このような文学史・社会史的流れのなかにおいてみれば、オースティンの小説が、結婚をもたらすものとしての「恋愛」をヒロインの主要な関心事にしているのは、ごく自然なことのように思われる。

こうしてみると、ジェイン・オースティンの小説における「恋愛」という主題を考察するには、文学史と社会史をつきまぜつつ、同時代の社会事情を背景として、先行文学から継承されたものを論じるといった手順がふさわしいかもしれない。しかし、ここではそのような方法はとらずに、オースティンの小説に描かれた「恋愛」をそれ自体独立したテーマとして論じようと思う。その場合、筆者のとる立場は次のようなものである。

「恋愛」は、いつどこでも同一の存在ではなく、社会と時代によってさまざまなかたちをとる。その意味で、単なる「自然」ではなく、文化の所産である。ヨーロッパ文学を特徴づける性格のひとつは、そこに現われた「恋愛」の多様性と、同時にその統一性である。古典古代から近代・現代にいたるヨーロッパ文学は、さまざまなかたちで「恋愛」を描いているが、そのうちどの時代をとってみても、「恋愛」に対する強い関心が失われたことはなかった。その意味でも「恋愛」はヨーロッパ文学の一貫した主題のひとつだが、本論ではそこから一歩を進めて、ヨーロッパにおける「恋愛」を、文学の領域にとどまらず、人々の思考と行動を規定するひとつの強力な観念と考えたい。「恋愛」はヨーロッパ文明のすみずみにまで浸透しており、ほとんどヨーロッパ文明を他の文明から際立たせる指標のひとつと言ってもよいほどである。重要なのは、ヨーロッパにおいては「恋愛」がきわめて自覚的な言説あるいは観念となっている点であって、このことはもちろん、文学についてもいえる。というよりもむしろ、「恋愛」はとりわけ文学と深い関係をもつ観念である。なぜなら、「恋愛」のない文学というものが考えられないのと同じように、「恋愛」は文学のなかで歌われ、語られることによってよりいっそう強力な観念となったからである。この相互関係の深さを示すのは、文学に描かれた「恋愛」に影響されて行動する人間を描いた文学だろう。そういうわけで、文学（およびその他の言説）に現われたさまざまな「恋愛」は、ひとつの観念のヴァリエーションとみなすことができる。もしこのヴァリエーションを通時的にたどってゆけば、ヨーロッパにおける「恋愛」の観念史あるいは精神史ができあがるだろう。[3] しかし、いささか大きくなりすぎた話を、ジェイン・オースティンに戻すことにしよう。

冒頭の設問は、以上の問題意識から出たものである。ジェイン・オースティンは、どういう「恋愛」のヴァリエーションを示しているだろうか。もちろん、それはオースティンに特有のものではなく、十九世紀初めのイギリスという時代・社会、そして（この時代の）小説というジャンルに制約を受けながら、同時代の人々の見解やイギリス小説一般とのあいだに共通点があるだろう。しかし、ここではそのような通時的・共時的関係をさぐることはしないし、方法論的な一貫性があるわけでもない。また、「恋愛」というテーマを手がかりに、ジェイン・オースティンの本質を理解するのに役立つような大きな問題へと議論をみちびくこともしない。この試論は、もっぱらテクストの表層に即した、方法において折衷的な、つつましい個人的な覚え書のようなものである。全体の構成は、第Ⅰ節でまずオースティンの「恋愛」を概括的に俯瞰し、第Ⅱ－Ⅳ節では個別的な問題をやや詳しく論じることにしたい。[4]

Ⅰ

ジェイン・オースティンの小説に登場する人物の恋に対する態度で興味深いのは、彼らが恋というものを決して不思議に思わないということである。恋におちると、彼らはすぐさまその事実を受け入れて、自分が恋しているということを疑わない。[5] 他人の感情を推測する場合にも、同じように確信にみちている（サー・トマス・バートラム：*MP* xxviii, 285；イザベラ・ソープ：*NA* xviii, 152；エマ・ウッドハウス：*E* vi, 70）。さらに、実際に恋をしているのかどうか疑わしい人物についても、同様の描写がなされる（コリンズ氏：*PP* xix, 148；エルトン氏：*E* xv, 148）。いずれにしても、読者にとって印象的なのは、登場人物がいともたやすく「恋におち」、この感情に対して懐疑をもたないこと、そして、その描写に用いられる言語表現の簡潔さである。ジェイン・オースティンの小説には ‘be in love’, ‘engaged heart’, ‘affection’, ‘attachment’, ‘tenderness’ といった語句がひんぱんに現われ、「恋愛」がこのうえなく自然な出来事のように起こる。

奇妙なことに、恋への期待だけでなく、恋の障害となるような状況が恋を生むという可能性さえある。たとえば、『高慢と偏見』のガーディナー夫人からエリザベスへの忠告や、『エマ』のウェストン夫人からエマへの警告がこのことを例示している。[6] あたかも、オースティンの時代には、「恋におちる」ことが強力な観念であって、「恋」に関しては、時として頭脳が心情に先行したかのようである。これに、ナイトリー氏のフランク・チャーチルへの観察[7]をあわせて読むと、恋愛がしばしば明確なルールのあるゲームであり、男女間の頭脳的なかけひきの場と考えられていた、旧制度下（アンシャン・レジーム）のフランス社交界を連想させる。[8]

『マンスフィールド・パーク』のプロットのアイロニーは、まさにこの社交界から抜け出してきたような伊達男ヘンリー・クロフォードが、素朴なファニー・プライスに恋してしまうという点にある。「感情をともなわない恋愛」の技術に精通したヘンリーは、まずファニーを自分に恋させようとたくらむが、しだいにその多感さに打たれ、結局ファニーと結婚しようと決心するにいたる（*MP* xxiv, 239；xxiv, 245；xxx, 296）。

エマ・ウッドハウスは、自分がフランク・チャーチルに恋していると思いこんで、――ジェイン・オースティンの小説ではまれなことだが――恋心がもたらす身体的徴候を自己分析する。[9] この明晰で簡潔な分析を読むと、まるで、エマは最初からそうなることを予想していたかのように思われる。ここに描写された感覚には、「未知」を感じさせるところがまったくないのである。

恋のきっかけとしてもっとも文学的ともいえる「一目惚れ」は、オースティンの世界では高い評価を得られず、主要な登場人物に起こることはほとんどない。『分別と多感』の、マリアンヌ・ダッシュウッドとジョン・ウィロウビーの悲劇的な恋はほぼ唯一の例外であり、『高慢と偏見』のエリザベス・ベネットとダーシーの関係は、これとはまったく対照的に描かれている。この二人は最初たがいに嫌悪を覚えるが、物語が進むにつれて愛しあうようになり、最後には幸福に結ばれる。この小説の原題『第一印象（ファースト・インプレッションズ）』は、多感な若い男女が出会ってすぐに恋におちるというセンチメンタル・フィクションの物語を、アイロニカルに逆転させたものである。いつダーシーを愛し始めたのか尋ねられたエリザベスは、徐々にこうなったので、どこに始まりがあったのかわからない、と答える（*PP* lix, 382）。この逆転は、ひとは現実には、ロマンスのように一目惚れをすることもないし、するべきでもないというオースティンの見解を示している。『ノーサンガー僧院』でもやはり、キャサリン・モーランドに対するヘンリー・ティルニーの愛情はもともと感謝の念から生まれたものだとして、ロマンスと実生活を対立させて説明している（*NA* xxx, 240）。

*

このように、ジェイン・オースティンの小説は恋をめぐって書かれているが、さらに詳しくいえば、それらはすべて恋と結婚の関係を主題にしている。どのプロットも、大小さまざまなエピソードをはさみながら進行するが、結局、ヒロインの幸福な結婚におわる。重要なのは、ヒロインがどうやって「理想の男性」に出会い、恋におちて、結婚するかであって、その後の生活がどうなるかは、『エマ』の最後の言葉（“the perfect happiness of the union”）が示しているとおり、文字通りにも比喩的にも、まったく別の話である。[10]

ヨーロッパ文学の伝統において、恋愛と結婚は本来調和することがなかった。文学的主題としての恋愛は、その源泉である「宮廷風恋愛（アムール・クルトワ）」の性格を継承して、いつでも結婚に対立したり、結婚の外部に現われた。あるいは、それは不幸な結婚を生み出す存在だった。恋愛と幸福な結婚がヨーロッパ文学で最初に調和したのは、十八世紀中葉の近代小説である。[11] もちろん、これには社会史的な背景がある。ジェイン・オースティンの時代にはすでに、地主層を含む中流階級のあいだでは、家系の利益を優先して親が相手を選ぶ結婚の形態がすたれはじめ、当事者である若い男女の意志を尊重する形態がこれに代わって優勢を占めつつあった。家父長が子供に自分の意志をおしつける結婚は、もはや時代遅れだったのである。[12] しかし、オースティンの小説に登場するような、さほど財産のない中流階級の娘たちには、そのかわりに新しい問題が持ち上がった。『エマ』のミス・ベイツのように独身のまま年老いたり、ジェイン・フェアファックスが考えたように家庭教師として自活する道を選ぶつもりがなければ、魅力を失うまえに、できれば富裕な伴侶を自分で見つけなくてはならなくなったのである。オースティンのヒロインたちは、まさにこの状況に直面している。

オースティンの小説には、この冷酷なルールを知りつくしていて、できるかぎり大きな資産を持つ相手と結婚するためにあらゆる手段を用いる娘たちが登場する。イザベラ・ソープやルーシー・スティールのように、より大きな財産を手に入れるためには、ためらわず恋人を裏切るこうした娘は、愛情をともなう結婚が女の生涯における最大の事件であり、物語をハッピーエンドのうちに終わらせる唯一の契機であるジェイン・オースティンの世界では、決してヒロインにはなれない。しかし、この二人でさえ、最初の恋人との恋を成就できるならば財産などいらない、と言い立てる。[13]（ここでの二人の表現にはあまりにも節度がないので、かえって読者に疑いをもたせる。）

これにくらべればより賢明で率直だが、やはり結婚について「現実的」な意見を表明するのは、シャーロット・ルーカスである。「現実的」なだけでなく、愛と結婚の関係に対してひどくシニカルなシャーロットは、エリザベス・ベネットに、女は最初から夫を愛している必要はないと言う（*PP* vi, 69）。そして、自分がコリンズ氏との結婚を決心したのは、その人格・姻戚関係・社会的地位を考えれば、まちがいなく幸福な結婚生活が送れるからだ、と説明する（xxii, 165−166）。これは、旧来のイデオロギーの生き残りである。

やがて真実の愛にめざめることになるエマ・ウッドハウスも、最初はある男が自分に「ふさわしい」かどうかだけを考え、噂に聞くフランク・チャーチルが、年齢と性格と資産の点で自分につりあった男にちがいない、と夢想する（*E* xiv, 139）。しかし、このように一時的にせよ世俗的な価値を恋愛に優先させるエマは、真の愛の結婚のために金銭上の障害や親族の反対にたちむかうジェイン・オースティンのヒロインとしては、例外に属している。たとえば、エリザベス・ベネットは、ダーシーと結婚する前に、伝統的に家族間の利害関係によって縁組を決める貴族階級の代表者ともいうべきレディ・キャサリン・ド・バラの妨害とたたかわなくてはならない（*PP* lvi, 364−365）。（もっとも、親のなかには、ダッシュウッド夫人のように恋愛結婚を積極的に支持する人人もいる。*SS* iii, 49）エリザベスに姉ジェインの与える忠告が、結婚の動機として恋を最優先させるこうしたヒロインたちの感情を要約している。[14]

しかし、オースティンのヒロインとヒーローたちは、最終的に恋のために結婚するとはいえ、結婚における金銭の重要性を無視するわけではない。財産のないまま結ばれたプライス夫妻の不幸におちいらぬように、キャサリン・モーランドとヘンリー・ティルニー、エリナー・ダッシュウッドとエドワード・フェラーズは、親が同意してくれるのを辛抱強く待つし、フランク・チャーチルとジェイン・フェアファックスは、都合よく亡くなったチャーチル夫人から遺産を相続することになる。

*

以上に見てきたとおり、ジェイン・オースティンのヒロインはすべて、（マリアンヌ・ダッシュウッドはある種の例外だが）愛する男と結婚する。その報いとして、キャサリン・モーランド、エリナー・ダッシュウッド、ジェインとエリザベス・ベネット、ファニー・プライス、エマ・ウッドハウス、アン・エリオットは、ひとしく、およそ考えられるかぎり最高の幸福を手に入れる。[15] これらのヒロインたちが恋人に対して抱く愛情は、破壊的な情熱でも、最初の出会いで燃え上がる恋でもない。フレデリック・ウェントワースは、七年間会わなかった初恋のアン・エリオットを妻に選ぶが、それはアンが最初の恋人だからではない（*P* xxiii, 244）。同様に、エドマンド・バートラムが最後にメアリー・クロフォードではなくファニー・プライスを選ぶのも、道徳的な理由による（*MP* xlviii, 455）。真実の愛にとって重要なのは、魅力や容姿の美しさよりむしろ ‘character’, ‘principle’, ‘mind’ なのである。ジェイン・オースティンの世界では、真に愛したり愛されるためには、道徳的にすぐれた人格をそなえている必要がある。ハリエット・スミスのように道徳的に「軽い」人間は、まともな意味で恋愛をすることができない。[16]

恋愛と道徳性の関連のもうひとつの側面は、最後に結ばれるヒーローとヒロインが、しばしば相手の人格に道徳的な影響を与え、「よりよい」人間になるということである。ヘンリー・ティルニーに言葉の誤用を訂正され（*NA* xiv, 122−123）、ロマンチックな空想から目をさますキャサリン・モーランドの例が示すように（xxiv−xxv, 199−201）、この過程は会話において、つまり言語を通じて起こる。クロフォード兄妹でさえ、ファニーとエドマンドからよい影響を受け、メアリー・クロフォードは破局のあとでもこの影響をいくらかとどめている（*MP* xlviii, 453）。ボックス・ヒルのピクニックでエマ・ウッドハウスがミス・ベイツの饒舌さを笑いものにして、ナイトリー氏からきびしくたしなめられると、エマは自分の他者への想像力の欠如と ── 無意識のうちに ── ナイトリー氏への愛に気づきはじめる（*E* xliii, 368）。自分のためにみずからこしらえた物語ともいえる、フランク・チャーチルに対する言葉のレベルでの想像上の恋とは違って、ここでは、涙を通じてエマの心情が語っている。ジェイン・オースティンが「身体言語」を表現的に用いているめずらしい例である。このあとに、ハリエットの告白による、ナイトリー氏の愛情への不安が来る。この不安のために、エマは初めてジェイン・フェアファックスの境遇に目を開かされる（xlviii, 409）。このように、真実の愛を認めることによって生まれる、自己の要求への謙虚さと他者への広い同情こそが、『高慢と偏見』でダーシーとエリザベス・ベネットを結ぶものにほかならない。ペンバリーを訪れたエリザベスとガーディナー夫妻は、不意にダーシーと出会う。ダーシーは、エリザベスと商人のガーディナー氏が親戚であることに驚くが、立ち去らずに会話に加わる（*PP* xliii, 275−276）。さらにダーシーは、エリザベスのために仇敵ウィッカムと交渉しさえする。これを知ったエリザベスは、ダーシーに対する見方を改め、後悔と感謝の念を抱く（lii, 338）。ダーシーも同じように、エリザベスが自分の高慢さをくじいてくれたことに感謝する（lviii, 378）。[17]

とはいえ、ジェイン・オースティンの世界では、道徳的価値はいつでも社会から切り離された個人の人格によって保証されるわけではない。ナイトリー家代々の地所（エステイト）であるダンウェル荘へのエマの賛嘆は、ナイトリー氏その人の人格に対するエマの尊敬と切り離すことができない（*E* xlii, 353）。この賛嘆は、まちがいなく、ボックス・ヒルでの忠告と舞踏会でのダンスと同じくらい、エマとナイトリー氏の結婚をもたらすのに大きな役割を果たしている。真の道徳的価値の象徴としての地所は、『高慢と偏見』にもやはり現れる。ペンバリーを訪れたエリザベスは、この地所の人工的に手を加えられていない自然と邸宅の良い趣味を嘆賞する（*PP* xliii, 268）。ペンバリーの女主人になってみるのも悪くないかもしれない、というエリザベスの冗談めかした言葉（xliii, 267）は、この意味で、文字通りに読まれなければならない。もちろん、この場面では、エリザベスとダーシーの偶然の出会いのほうがより重要な出来事には違いないが、エリザベスによるダーシーの人格の見直しが彼の地所で起こるのは偶然だろうか。『マンスフィールド・パーク』でのように中心的な位置を占めているわけではないが、この二篇の小説でも、地所（エステイト）にはやはり道徳的な意味が込められているのである。[18]

*

さて、以上で概括的な総論を終わることとし、以下の三節では各論、つまり「恋愛」と言語、読書、情熱の関係を眺めることにしよう。

II

現代の読者がジェイン・オースティンの小説を読んで一様に受ける印象は、その言語表現の極度の簡潔さと明確さである。この小説家は、意図するところを言い表わすのに必要な言葉を必要な数だけ用いているように思われる。オースティンは何事も言い落とすことがなく、もし省略・暗示的な表現を用いる場合には、読者が明確に作者の意図を理解することを確信してそうしていると感じられる。この印象がとりわけ強くなるのは、ヒロインの恋へのめざめとヒーローの恋の告白を描いた場面である。[19] 恋する男の困惑や初めて恋を知った女の心の動揺といったものをここに求めても、無駄である。彼らが言葉と思考に困ることは決してない。オースティンが恋を描く場面では、おそらく他の場面にもまして、「明晰さ」が支配している。実際、恋するヒロイン、特にエリザベス・ベネットとエマ・ウッドハウスの頭脳の明晰さは驚くべきものである。[20]（これにくらべて、ここでのナイトリー氏の無口さは、奇妙に表現的でさえある。）

ヒロインによる恋の決定的な認知が経験の言語レベル

で起こる、あるいは、そこへと完全に移し換えられるのと同じように、真の恋人たちが相手の人格を徐々に理解・吸収し、最終的に愛情を確かめあうのも、言葉の交換による。[21] オースティンの小説の若い男女がたがいの体に触れることのできる唯一の機会である舞踏会の場面でも、描写されるのは、身体的感覚ではなく二人の会話である。『ノーサンガー僧院』と『エマ』でもそうだが、『高慢と偏見』の舞踏会で、エリザベスとダーシーはこの上なく鋭い明晰な言葉で相手の考えや感情をさぐりあう。これはまるで、二つの頭脳の言葉によるフェンシングのようである（*PP* xviii, 134）。身体の動きが言葉の動きを駆り立てているようにも思われるが、ジェイン・オースティンの世界では言葉が身体に先行するので、その逆ではない。同様に、『高慢と偏見』、『エマ』、『説得』の終わりに描かれている、たがいに愛を告白しあった恋人たちの長い会話も、恋人の睦言というよりむしろ、完全に理性的な二人の人間の討議に似ている。

このことを言い換えるならば、ジェイン・オースティンの「恋愛」は、身体よりも頭脳と心情の領域に（そして、おそらくは心情よりも頭脳の領域に）より多く属しているということになるだろう。オースティンの小説においては、とりわけ「真の」恋人たちをとってみると、「恋愛」の性的側面がほとんど常に欠落しているのである。[22]

Ⅲ

ジェイン・オースティンの最初の小説『ノーサンガー僧院』は、ヒロインが流行のゴシック小説やセンチメンタル・フィクションを読むことで身につけたロマンチックな期待を主題にしている。キャサリン・モーランドの想像力は、本のなかで出会った事件・場所・人物でいっぱいなので、実生活でも同じ事件が起こるのではないかという期待をするようになる。キャサリンの空想は、ノーサンガー荘をユドルフォ城、ティルニー将軍をモントーニ伯爵と思いこむところで頂点に達するが、結局は実生活の事件によって現実へと引き戻される。キャサリンは現実的なヘンリー・ティルニーと現実的な仕方で恋におち、結婚するが、それ以前のキャサリンの恋愛に関する期待は、書物の世界から生まれたものである。イザベル・ソープが兄ジェイムズと婚約したことを聞いたキャサリンは、それまでに読んだ小説に登場するヒロインたちを思い浮べるのである。[23]

こうした、「理性的」恋愛と、ロマンスに影響されたという意味での「ロマンチック」な恋愛（「小説的恋愛（アムール・ロマネスク）」と呼んでもよいかもしれない）との対立は、ジェイン・オースティンのその後の作品にもくりかえし現われる。たとえば、マリアンヌ・ダッシュウッドとジョン・ウィロウビーの出会いは、ロマンスの世界を強く思わせるような仕方で描かれている。妹マーガレットと散歩にでかけたマリアンヌは足首をくじいて動けなくなってしまう。そこを通りかかったウィロウビーがマリアンヌを抱き上げ、ダッシュウッド家に運び込んで、事のあらましを母親とエリナーにいとも優雅に説明する。マリアンヌの目に映ったウィロウビーの姿は、まさにロマンスのヒーローそのものである。[24]

エマ・ウッドハウスの想像力が次々に紡ぎ出す空想も、この「ロマンチック」な期待を背景としていると考えることができる。それまでの作品に登場するヒロインたちと違って、エマは一度も、本を読んだり文学的言及をしているところを描かれるわけではないが、エマの想像力はひどく「ロマンチック」な働き方を示す。いつでも恋愛をめぐって動きまわるのである。フランク・チャーチルがジプシーたちからハリエット・スミスを救い出したことを耳にしたエマは、二人が恋におちたに違いないと想像する（*E* xxxix, 331）。ジェイン・フェアファックスの身の上を知ると、ここでもエマの想像力はすぐさま働き出し、ジェインのディクソン氏への報われぬ恋をこしらえあげる（xx, 181; xxvi, 227）。エマはハリエットの出自についても想像をめぐらさずにはいられない。エマの結論は、ハリエットの父親は資産家の紳士に違いない、というものである（viii, 88）。こうした、私生児・姦通・騎士と乙女の恋をめぐるエマにとって「ごく自然な」空想は、オースティンの時代の若い娘にとって一般的な読書が生み出したものだと考えても、さほど無理はないだろう。[25]

しかし、それ自体読書から生まれたこの「ロマンチック」な感受性が時代の精神に完全に浸透していたために、エマ・ウッドハウスのように、一見したところ「本の虫」にはみえない若い娘もロマンスを思わせる空想をしたとすれば、恋愛に関する期待が読書によるものかどうかを詮索することは無意味になる。社会史家ローレンス・ストーンによれば、十八世紀後半から「恋愛（ロマンチック・ラブ）」と「ロマンチック」な小説は同時に影響力を増していったので、どちらがどちらの原因をなしたのか決めるのは難しいという。この時代になって初めて、「恋愛」が有産階級の結婚の動機として公認されるようになり、それと時を同じくして、この「恋愛」を主題とする大量の小説が貸本屋の棚にあふれだした。ストーンは続けて、十八世紀末から一種の流行となったこの「恋愛（ロマンチック・ラブ）」という現象全体が、若い男女の行動に強力な影響を及ぼしはじめ、無思慮で不幸な結婚や悲劇的な恋の原因にもなったことを記している。このあとにストーンは、激しい恋におちたあげく捨てられたある女性の手記を引用しているが、われわれにはマリアンヌ・ダッシュウッドを思わせるこの嘆きは、まるで現実とフィクションの境界線を取り払ってしまったかのようにみえる。[26]

ジェイン・オースティンの小説は、ヒロインたちがこの種の「恋愛」のむなしさに気づくように書かれているといってもよいだろう。キャサリン・モーランドは、イザベラ・ソープの「多感さ」が偽りであることを悟り、ヘンリー・ティルニーに対してより理性的な愛情を抱くようになる。エマ・ウッドハウスは、自分自身がみずからの「ロマンチック」なたくらみの操り人形だったことを知り、子供の頃からの指南役であるナイトリー氏と結婚する。マリアンヌ・ダッシュウッドは、平凡な中年男ブランドン大佐の妻になる。[27] オースティンがこのような物語をもとに自分の小説を書いたのは、「ロマンチック」な小説を読むことで引き起こされる愚行に対抗しようと考えたからかもしれない。[28]

Ⅳ

「古典的」な芸術家がおしなべてそうであるように、ジェイン・オースティンもまた、時として、排除されたもの――つまり、オースティンが小説に書かなかった、あるいは書こうとしなかったものとの関連において論じられることがある。メアリー・ラセルズは、死、金銭、大衆、超自然現象を挙げている。[29] ここに政治と宗教を付け加えることもできるだろう。「恋愛」については、前にその性的側面の排除に触れた。シャーロット・ブロンテは有名なオースティン批判のなかで、独自の発見をしている。ブロンテによれば、ジェイン・オースティンの小説はイングランドの地主階級の生活を細密画風に描くのに巧みだが、激しい「情熱（パッションズ）」にはまったく無縁であり、「感情（フィーリングズ）」にすらときおり軽く会釈してみせるにすぎない、という。[30] ブロンテはオースティンの小説のいくつか、とりわけ『分別と多感』を読んでいなかったから、もしブロンテが六篇の小説すべてを知っていたらと仮定してみるのも興味深いことだが、この試論の最終節では、ジェイン・オースティンは実際に「情熱」――社会に対立する情熱的恋愛を描いていないのかどうかを考えてみたい。

もちろん、われわれは、ジェイン・オースティンに情熱的な恋のもっとも明白な形態が現われることを知っている。すなわち、姦通、そしてそのヴァリアントともいうべき誘惑と駆け落ちである。[31] 『分別と多感』では、ブランドン大佐の最初の恋人イライザが不幸な結婚のゆえに「罪深い関係」（*SS* xxxi, 217）を結び、そこから生まれたミス・ウィリアムズがウィロウビーに誘惑され、捨てられる。『高慢と偏見』では、リディア・ベネットがウィッカムと駆け落ちするが、あやうく汚名をまぬがれる。[32] 『マンスフィールド・パーク』のマリア・バートラムの場合は、より深刻なものである。マリアはヘンリー・クロフォードに恋しているが、妹ジュリアへの嫉妬と、結婚がもたらす富と新しい家庭のために、愚かなラッシュワース氏と結婚する。サー・トマスは娘の真意を確かめようとするが、マリアは、ラッシュワース氏の人格を尊敬しており、幸福になれるに違いない、と答える。この答えに安心したサー・トマスは、マリアの感情はさほど強くはなく、恋に目をくもらされずに結婚するぶん安定した結婚生活を送れるだろう、と考えてしまう（*MP* xxi, 215）。マリアの愛のない結婚の結果は、ラッシュワース夫人とヘンリー・クロフォードの短い情事であり、離婚である。破局を招いたのは、まさに、サー・トマスとマリア自身が見過していた感情・情熱の強さだった。はじめのうちほんの遊びのつもりでいたヘンリーは、マリアの情熱にとらえられ、退路を失ってしまうのである。[33] この事件はプロットの重要な部分であり、二人は周縁的人物というには程遠く、その動機もこれまでの作品とはくらべものにならないほど詳細に描かれている。ヘンリー・クロフォードはただの「悪漢（ヴィレン）」ではなく、ファニー・プライスを理性的に愛することのできる男であり、マリア・ラッシュワースも無知な小娘ではなく、成熟した人妻である。

『マンスフィールド・パーク』に姦通として現われる「情熱」は、二人の当事者を不意に襲う強力な何物かである。マリアは自分の情熱を、みずからの力でコントロールすることができない。また、洗練された伊達男ヘンリー・クロフォードは、皮肉なことに、ふたたび「感情」に打ち負かされてしまう。この小説では、エドマンド・バートラムでさえ、メアリー・クロフォードとの最後の会話であやうく情熱の罠にとらえられそうになる。[34] この場面で、ジェイン・オースティンは、道徳家ではなく、情熱のもつ力と危険性を熟知した人間として書いている。

イアン・ワットは、「情熱恋愛（アムール・パシオン）」の典型としての姦通はヨーロッパ文学に遍在するというドニ・ド・ルージュモンのテーゼに反対して、イギリス文学は本来姦通を事とした宮廷風恋愛の伝統と完全に断絶したと主張している。[35] ジェイン・オースティンの小説の舞台になってい

るイギリス地主階級の社会では、貞節が絶対視され、不貞をはたらく妻は、ラッシュワース夫人のようにこの社会から追放されるほかはなかった。それゆえ、この社会における姦通は、喜劇的な事件ではありえない。[36] 逆説的なことに、「情熱恋愛（アムール・パシオン）」はオースティンの小説において本来の活力を保っているのである。

情熱的な恋の本質は、「障害」の存在によって強められるという点にある。[37] ジェイン・オースティンの小説では、社会がこの障害の役割を果たしている。十九世紀初頭イングランドの地主層が形成する社会は、閉鎖性・安定性・能弁さを特徴とする、田舎の小さな共同体であり、たがいに顔と名前を知っている一定の成員と、さらに限られた数の親しい知人から成っている。この社会に生活する人々は、ヘンリー・ティルニーが正確に言い当てているように（*NA* xxiv, 199）、「自発的なスパイ」に見張られていると感じたに違いない。ここでは、ひとは他人のどれほど些細な変化も見逃さず、隣人にそのことを話すので、だれもがすぐにそれを知るにいたる。このような社会では、ひとは時として仮面をかぶったり、何事かを秘密にしておく必要を感じるだろうし、ジェイン・フェアファックスのように、時折ひとりきりになりたいという衝動に駆られ、叫び出したくもなるだろう（*E* xlii, 358）。[38]

この社会に暮らす恋人たちが、何かの理由で恋を他人の目から隠さなければならなくなると、恋心はよりいっそう情熱的になり、恋人たちは時として「心身症的」徴候を現わしはじめる。すなわち、身体言語を用いるのである。『エマ』のフランク・チャーチルとジェイン・フェアファックスの場合が、これにあてはまる。婚約の事実をチャーチル夫人に、つまりはハイベリーの住民に知られぬようふるまわざるをえないフランクとジェインは、それぞれ違った仕方で無意識に抑圧のしるしを表現してしまう。ジェインは、言葉でも行動でも、できるだけ無表情になろうとする（*E* xx, 182; xxviii, 248; xli, 343）。その結果、マリアンヌ・ダッシュウッドのように、人前で泣き崩れる一歩手前までゆく（xxxiii, 294）。これに対して、フランクのほうは、過剰な言葉と行動で反応し、これはボックス・ヒルのピクニックで頂点に達する。エマにありとあらゆる陽気な賛辞を呈したあげく、ほとんど病的なまでの多弁にいたるのである（xliii, 361−368）。『分別と多感』の結末近く、ダッシュウッド家を訪れてようやくエリナーに求婚する場面で、「理性的」な恋人のひとりであるエドワード・フェラーズは、彼らしからぬ、またジェイン・オースティンの世界では異常というほかない行動をとる。エドワードは窓辺に置いてあるハサミを取り上げて、さやを切り刻んでしまうのである（*SS* xlviii, 349−350）。ルーシー・スティールから自由の身になったこと、そしてエリナーを愛していることを伝えたいという欲求に駆り立てられて、しかしダッシュウッド夫人とマリアンヌが同席しているために礼儀作法を守らざるをえず、エドワードはここで、ジェインとフランクのように、「理性的」な恋人たちには概して起こらないことだが、自分の身体を制御できなくなっている。

このように、小説の主要な関心事とはいえないにせよ、情熱的な恋の描写において、ジェイン・オースティンは、伝統的な意味での「恋愛」に内在する反社会性をいくらか表現している。マリアンヌとウィロウビーの情熱（パッション）＝受難がドニ・ド・ルージュモンの言う「不幸な相思相愛」にきわめて近い、『分別と多感』を書いたあとでは、オースティンは、結婚へといたる幸福な恋愛、あるいは愛をともなう幸福な結婚をもっぱら描くことになる。しかしながら、オースティンのヒロインたちは、恋のために結婚することで、「社会」そのものにではないとしても、現存する社会に対立し、そのなかに変化を導入しようとしているのである。（そのもっとも顕著な例がエリザベス・ベネットであろう。*PP* lvi, 367）個人の自由な選択を社会の要求に優先させることにおいて、恋愛による結婚は潜在的に反社会的な行動であり、ジェイン・オースティンが恋愛の道徳的な側面を強調するのは、（これはその小説全体にわたって言えることだが）二つの対立物を調和させようとしてのことと思われる。すなわち、理性と感情、あるいは思慮と感性、あるいは秩序と自発性、あるいは社会と個人。

*

最後に、結論にかえて二点を指摘しておきたい。第一に、ジェイン・オースティンの小説に現われる「恋愛」は、言語に深く結びついている。自分が用いる言葉に絶対の信頼を寄せるオースティンにとって、「恋愛」は言語の内部にあるので、言語の外部の、身体に属する、表現しがたい存在としての「恋愛」は切り捨てられるのである。ヒロインたちもまた、恋を言葉として経験するために、「恋にめざめる」ときにも、これを未知の存在と考えることがない。第二に、オースティンの小説においては、「恋愛」が結婚へといたる唯一の正しい動機だが、この「恋愛」の意味内容は、むしろ伝統的に結婚に必要な条件とされてきた穏やかな愛情や友情といったものに近い。[39] オースティンは、恋におちたヒロインの幸福な結婚というロマンスのプロットを借用しながら、「恋愛」に微妙な意味変化を施したと言えるかもしれない。

《註》

(1) オースティンと先行文学の関係については、Mary Lascelles, *Jane Austen and Her Art* (Oxford: Oxford U.P., 1939), ch. II, 'Reading and Response', pp.41−83; Marilyn Butler, *Jane Austen and the War of Ideas* (Oxford: Clarendon Press, 1975). 特にバトラーの興味深い新版序文（1987年）は、近年のフェミニズム批評を視野に入れつつ、同時代の女性作家と比較してオースティンの結婚観が保守的であったことを説いている。

(2) 社会史家ローレンス・ストーンはこの変化を「感情の個人主義」と呼んでいる。Lawrence Stone, *The Family, Sex and Marriage in England 1500−1800* (Harmondsworth: Penguin Books, 1979), ch.6, 'The Growth of Affective Individualism', pp.149−180.

(3) たとえば、次書を参照。Denis de Rougemont, *L'Amour et L'Occident* (Paris: Plon, ed. 10/18, 1972); Julia Kristeva, *Histoires d'amour* (Paris: Denoël, ed. Folio, 1983). ルージュモンの古典的な著作は、（古典古代と区別された）中世以降のヨーロッパの「恋愛」をトリスタンの「神話（ミト）」の展開と考える点で、一貫している。クリステヴァは、プラトンからオウィディウス、聖ベルナール、トルバドゥールを経てスタンダール、ボードレールにいたる幅広いテクストを論じている。（この種の研究はなぜかフランス語圏に多いようである。）

(4) ジェイン・オースティンのテクストの引用・引照はすべて Penguin 版により、カッコ内に小説の略号、ローマ数字で通しの章番号、ペンギン版の頁番号を入れる。略号は次のとおり。

NA : *Northanger Abbey*
SS : *Sense and Sensibility*
PP : *Pride and Prejudice*
MP : *Mansfield Park*
E : *Emma*
P : *Persuasion*

(5) " 'I cannot remember the time when I did not love Eliza...'" (*SS* xxxi, 215). " 'I do, I do like him,' she replied, with tears in her eyes, 'I love him' " (*PP* lix, 385). "Emma continued to entertain no doubt of her being in love" (*E* xxxi, 268).

(6) " 'You are too sensible a girl, Lizzy, to fall in love merely because you are warned against it' " (*PP* xxvi, 181). " 'Why really, dear Emma, I say that he is so very much occupied by the idea of *not* being in love with her, that I should not wonder if it were to end in his being so at last' " (*E* xxxiii, 290).

(7) "This gallant young man, who seemed to love without feeling..." (*E* xli, 344).

(8) 十七・十八世紀フランス・モラリストの箴言を参照。Chamfort, Maxims 348, 359 (ed. Folio, pp.108, 110): "L'amour est comme les maladies épidémiques. Plus on les craint, plus on y est exposé." "L'amour, tel qu'il existe dans la société, n'est que l'échange de deux fantaisies et le contact de deux épidermes." La Rochefoucauld, Maxim 402 (ed. Folio, p.109): " Ce qui se trouve le moins dans la galanterie, c'est de l'amour."

(9) " 'This sensation of listlessness, weariness, stupidity, this disinclination to sit down and employ myself, this feeling of everything's being dull and insipid about the house! —— I must be in love; I should be the oddest creature in the world if I were not——for a few weeks at least' " (*E* xxx, 266).

(10) スチュアート・テイヴは、ジェイン・オースティンにおいては結婚そのものではなく、結婚にいたるまでの人間的成長が問題なのだと主張する。Stuart M. Tave, *Some Words of Jane Austen* (Chicago: Chicago U.P., 1973), p.11. しかし、オースティンのヒロインたちにとっては、結婚がもたらすはずの幸福もやはり大いに重要だということを忘れてはならないだろう。メアリー・クロフォードでさえ、" the domestic happiness" (*MP* xlviii, 453) に憧れるのである。

(11) イアン・ワットによれば、近代小説の発展は、他の国々にさきがけてイングランドで最初に実現した女性の行動の自由（特に結婚に関する）と関係があるという。Ian Watt, *The Rise of the Novel* (London: Chatto and Windus, 1957), p.138.

(12) Cf. Stone, *The Family, Sex and Marriage*, ch. 7, 'Mating Arrangements', pp.181−216.

(13) " 'For my own part,' said Isabella, 'my

wishes are so moderate, that the smallest income in nature would be enough for me. Where people are really attached, poverty itself is wealth: grandeur I detest: I would not settle in London for the universe' " (*NA* xv, 133). Cf. (*SS* xxiv, 164−165).

(14) " 'And do you really love him quite well enough? Oh, Lizzy! do any thing rather than marry without affection' " (*PP* lix, 382). オースティンは姪ファニー・ナイトにほとんどこれと同じ言葉で忠告している。"Anything is to be preferred or endured rather than marrying without Affection...". Letter to Fanny Knight, 18 November 1814, *Jane Austen: Selected Letters 1796−1817*, ed. R.W.Chapman (Oxford: Oxford U.P., 1955), p.175.

(15) "Anne was tenderness itself, and she had the full worth of it in Captain Wentworth's affection" (*P* xxiv, 253). "With so much true merit and true love, and no want of fortune or friends, the happiness of the married cousins must appear as secure as earthly happiness can be" (*MP* xlviii, 456).

(16) "... it really was too much to hope even of Harriet, that she could be in love with more than *three* men in one year" (*E* li, 434).

(17) オースティンの甥ジェイムズ・エドワード・オースティン−リーの『回想録』の書評を書いた批評家リチャード・シンプソンは、恋人たちが行なう知識の交換や相手の人格形成こそがもっとも確実な愛の基礎だという、オースティンの「プラトン的」見解を指摘している。1870年のことである。 Richard Simpson, Unsigned review of the *Memoir*, in *North British Review*, April 1870, rept. in *Jane Austen: The Critical Heritage*, ed. B.C. Southam (London: Routledge and Kegan Paul, 1968), p.244.

(18) 『高慢と偏見』へのトニー・タナーの註釈（ペンギン版 p.399）によれば、ペンバリーの美的価値を倫理的価値に結びつけるエリザベスは、すぐれて十八世紀的な思考法に従っているという。

(19) ダーシー："'In vain have I struggled. It will not do. My feelings will not be repressed. You must allw me to tell you how ardently I admire and love you' " (*PP* xxxiv, 221).

エマ："It darted through her, with the speed of an arrow, that Mr. Knightley must marry no one but herself!

Her own conduct, as well as her own heart, was before her in the same minutes. She saw it with a clearness which had never blessed her before" (*E* xlvii, 398).

(20) "While he spoke, Emma's mind was most busy, and with all the wonderful velocity of thought, had been able——and yet without losing a word——to catch and comprehend the exact truth of the whole..." (*E* xlix, 417−418). Cf. (*PP* l, 325).

(21) オースティンの恋愛描写の「言語性」('verbalism') については、B.C.Southam, *Jane Austen* (Harlow: Longman, 1975), pp.43−46。

(22) ジョージ・スタイナーは、十九世紀小説の性的表現の変遷をたどったエッセイで、オースティン、ディケンズ、ジョージ・エリオット、フロベールらをあわせて論じているが、オースティンにおける「性」の不在は、表現の抑圧によるのではなく、作者と読者が結んだ暗黙の協定によって省略された領域だとしている。George Steiner, "Eros and Idiom", in *On Difficulty and Other Essays* (New York: Oxford U.P., 1978), pp.95−98.

(23) "This charming sentiment ... gave Catherine a most pleasing remembrance of all the heroines of her acquaintance; and she thought her friend never looked more lovely than in uttering the grand idea" (*NA* xv, 133). 読書から生まれた空想を主題にしたもうひとつの小説、フロベールの『ボヴァリー夫人』から、これに酷似したパッセージを引用しておきたい。愛人ロドルフに会ったあとのエマ・ボヴァリーの夢想である。"Alors elle se rappela les héroïnes des livres qu'elle avait lus, et la légion lyrique de ces femmes adultères se mit à chanter dans sa mémoire avec des voix de soeurs qui la charmaient." (II. ix, ed. Livre de Poche, p.196.)

ジョージ・レヴァインは、リアリズム小説の伝統を通じて、主人公が読書から得た空想を捨ててありのままの現実を受け入れるという「幻滅」('disenchantment') の構造が認められるとして、『ノーサンガー僧院』を『ドン・キホーテ』、『ボヴァリー夫人』、『日陰者ジュード』といった作品の系譜に位置づけている。

その一方で、オースティンのプロットが、ロマンスから継承した（ヒロインの恋へのめざめと結婚という）仕掛けで解決される、というパラドックスにも注意している。George Levine, *The Realistic Imagination* (Chicago: Chicago U.P., 1981), pp.71, 80.

余談めくが、『神曲』のパオロとフランチェスカの挿話がはやくも示しているように、ヨーロッパ人にとっての「恋愛」とは、読書と深く結びついた感情あるいは観念なのではないだろうか。

(24) "His person and air were equal to what her fancy had ever drawn for the hero of a favourite story.... Every circumstance belonging to him was interesting.... Her imagination was busy, her reflections were pleasant..." (*SS* ix, 74−76).

(25) この解釈をとらない批評家が多数派である。たとえば、Douglas Bush, *Jane Austen* (London: Macmillan, 1975), pp.161−162. これに対してラセルズは、明確に、エマの空想が読書によるものだとしている。Lascelles, *Jane Austen and Her Art*, pp.68−69. 十八世紀イギリス社会、特に貴族階級で私生児や愛人との同居がめずらしくなかったことについては、Roy Porter, *English Society in the Eighteenth Century* (Harmondsworth: Penguin Books, 1982), pp.280−282.

(26) 小説と見まごうばかりの、このドロシア・ハーバートなる女性の手記を、ついでに引用しておこう。（事件が起こったのは1794年、手記は後年の回想である。）"What could induce the specious rogue to seduce my affections, betray me to lingering torments, and then to desert me for ever, is a problem I never could solve. Ah, my poor heart, what cruelties did it suffer. What more than Hell-born woe when the monster struck his last blow and left me for ever benighted in intolerable despair." (Stone, *The Family, Sex and Marriage*, p.191.)

(27) "Instead of falling a sacrifice to an irresistible passion, as once she had fondly flattered herself with expecting, ... she found herself at nineteen, submitting to new attachments, entering on new duties, placed in a new home, a wife, the mistress of a family, and the patroness of a village" (*SS* l, 367).

(28) ウォルター・スコットによる『エマ』の書評（1815年）を見ると、当時の読者がそのような読み方をしていたことが推測できる。スコットは、『エマ』を「ロマンチック」な小説と対比して、「自然」を写した「新しいスタイルの小説」と呼び、若い読者はこれを読んだあとでもすぐに実生活に戻ることができる、と書くが、その一方でこの小説に「ロマンチック」な情感が不足していることを嘆いてもいる。Walter Scott, Unsigned review of *Emma*, in *Quarterly Review*, October 1815, rept. in Southam, ed., *The Critical Heritage*, pp.63−69.

(29) Lascelles, *Jane Austen and Her Art*, pp.129−133.

(30) Charlotte Brontë, Letter to W.S.Williams, 12 April 1850, rept. in Southam ed., *The Critical Heritage*, p.128.

(31) もっとも、トニー・タナーは、十八世紀小説に頻出する誘惑・密通（フォーニケーション）・暴行は社会に組み込まれており、社会にカテゴリーの混乱を導入する十九世紀小説の姦通（アダルテリー）とは異質の現象としている。Tony Tanner, *Adultery in the Novel* (Baltimore: Johns Hopkins U.P., 1979), p.12.

(32) ラセルズによれば、誘惑はリチャードソンから継承された、小説のクライマックスを作るテクニックである。Lascelles, *Jane Austen and Her Art*, pp. 72−73.

(33) "... he had put himself in the power of feelings on her side, more strong than he had supposed. —— She loved him; there was no withdrawing attentions, avowedly dear to her" (*MP* xlviii, 452).

(34) " 'I looked back. "Mr. Bertram," said she, with a smile —— but it was a smile ill-suited to the conversation that had passed, a saucy playful smile, seeming to invite, in order to subdue me; at least, it appeared so to me. I resisted; it was the impulse of the moment to resist, and still walked on" (xlvii, 444−445).

(35) Watt, *The Rise of the Novel*, p.137; Rougemont, *L'Amour et l'Occident*, p.55: "L'amour heureux n'a pas d'histoire *dans la littérature occidentale*. Et l'amour qui n'est pas réciproque ne passe point pour un amour vrai. ... ce qui exprime le plus profondément l'obsession de l'Européen: connaître à travers la douleur, c'est le secret du mythe de Tristan, l'amour-passion

à la fois partagé et combattu, anxieux d'un bonheur qu'il repousse, magnifié par sa catastrophe. — *l'amour réciproque malheureux.*"

㊱ 対照的にコミックな例として、スタンダール『赤と黒』の、ジュリアン・ソレルとレナール夫人の情事を挙げておこう。「継続」した伝統の典型的な産物である。

㊲ Cf. Rougemont, *L'Amour et l'Occident*, p.54: "Ainsi, soit qu'on désire l'amour le plus conscient, ou simplement l'amour le plus intense, on desire en secret l'obstacle. Au besoin, on le crée, on l'imagine."

㊳ 『分別と多感』への序文（ペンギン版 p.15）で、トニー・タナーはマリアンヌ・ダッシュウッドの病気の原因をこの社会の性格に求めている。

㊴ 正反対のイデオロギーとして、モンテーニュの『エセー』を引いておこう。もっとも、この二人を比較する場合、時代だけでなく、伝統と国民性の違いも考えあわせるべきかもしれないが。（Ⅲ, v, ed. Pléiade, p.831）"Le mariage a pour sa part l'utilité, la justice, l'honneur et la constance: un plaisir plat, mais plus universel. L'amour se fonde au seul plaisir.... Ce n'est pas plus amour s'il est sans fleches et sans feu."